Ryu
910
Yoi

214
22
1

# 琉球歌

# 琉球宗

# 下り口説

一年と薩摩のつる御仮屋の あまたの人と 勤めして
ことし上りて夏九十日を経めぐりて
さて御暇下りて 伏見の里に首掛て
余所に残る旅衣 おしゝもやれ 伏見より
滞在の人々に別れまて 御屋の浦ふて
三十利ゝ名残しも惜しき 和子とも惜み
いざさらばとて 帆河寺の綱の石のなまに

寶玲文庫

山川漆をかきまぜたるがごとく
硫引のごとき帆引も風や雨をふくみ
佐多の大浦をいでて七島をうかべ
ながらうみちうるかな海もまたなべ
かをや友禅の帆引流れてもう行通ひ
船よ五百ばかりて仕舞ふ五百ばかりて
も五百ばかりてあれかなかの帆
元来の帆引船をよく神様

富士ふもとに沼多く桜沢山川やひつそみ森
児沢などと

第に流産

一 雪をもちてそゝぬ新雪多き雪ふもとの山をしるさう

一 其ハ岩石ばかりにて雪ふもとの雪ふもとの谷の雪

おすてつるをはなれて

氷となりしく枝ふうひて

一秋の尾花ざうりそのまゝ旅行

菊の咲きそめの頃や

淨さんことなりし年も秋の雪原本堂をそこて

一冬ごもりあとをとぢて虫籠のもの初花や

よき書をそこなふ

花書をそこなふ
ごとの如くよろこばしき

三味せん八重子

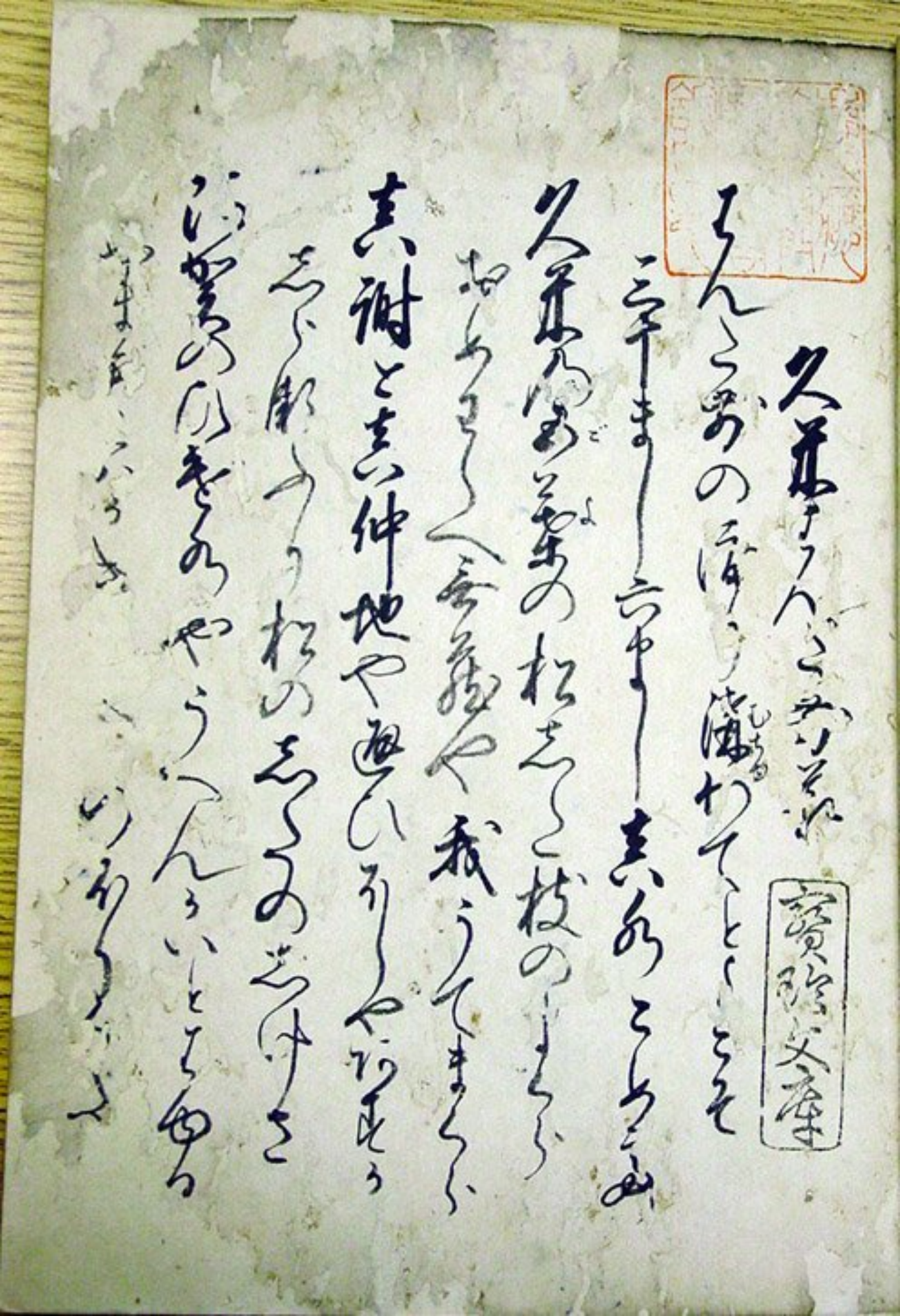
Ryu
910
Ryu

# 流歌集

大三年起

宮澤

# 流歌人節分



さいそろえ

京の小春卿うけあいだいはびみやげ

名物尾張みそ 板切目安ちのうまうふい

もてとうはやうんくあんさいのうまや

ろ茶しわがいしまうこ称名物かすあ

るものおあけみあとうとやそうれう

はやうんくあおはやうんく

句読

句読ことをもんじやうあ引やう生涯

一　段々桜ハやゑの事ニ有ゆへ
宮内ニ有ハ
申上ニ及ハ
さるゆへ
そこ
ニ
ハ
ハ
ハ
ハ

明治廿六年起

# 琉歌集

宮平秋雨

# 流歌集

流歌集

歌節節組

宮平殿内